アイドルオタクのﾓｶﾞﾐｻﾝ

アイドルオタクのﾓｶﾞﾐｻﾝ

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20514523

R-18, モ腐サイコ100, ♡喘ぎ, 最霊, 霊幻愛され

師匠総受け『では無い』、師匠愛されの最霊です。♡喘ぎが含まれます。最さん生前ｉｆでアイドルオタク、師匠や中学生組がアイドル設定です。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

アイドルオタクのﾓｶﾞﾐｻﾝ

霊幻新隆から、突風が吹いた。

落ち目のアイドルとは思えない歌唱力、圧倒的な声量。
マイクを通さない美しい歌声が、ホールを荒れ狂う。
私の目は驚きで釘付けになる。
アレ（・・）はコメディ担当では？
アレ（・・）は事務所に無理矢理つけられたオマケのメンバーでは？
そんな偏った思想を、根こそぎ吹き飛ばす化物のようなアイドル。

それが、レイちゃんだった。

※

いつまでも良くならない母の病気。たいして収入が上がらないのに増え続けていくテレビの仕事。
私のストレスは限界まで来ていた。これ以上は病む。

そんな時に出会ったのが……アイドルだった。

テレビから覗く美しい容姿。美しい声。『ご飯は薔薇だけ食べてます☆』美しい人生。私はそれに魅力された。
美しいモノはいい。悪霊や呪いのような醜いモノばかり見てうんざりしている私を癒してくれる。
女性アイドル、男性アイドル、みな私の宝物になった。
彼らは数が多い。私は気分によって好きなアイドルを選び、円盤を再生し、ひと月に一回はライブに行っていた。
ちょっと飽きてきたなと言う頃にはまた新しいアイドルがデビューする。良く出来た娯楽だ。
そんな風にアイドルをつまんで楽しんでいた時にデビューしたの

が、女装アイドルグループ『サイコテット』だ。
すでにモデルとして活動していた美少年として名高い花沢輝気、そして◯◯芸能事務所の秘蔵っ子、影山兄弟。子役として去年センセーショナルにデビューした鈴木将。そうそうたるメンバーだ。
リーダーの霊幻新隆？を除けば。誰だコイツ。容姿もパッとしないし、年齢行き過ぎだろ……ハタチ？嘘つけ三十代だろお前。あー、まあ、事務所が無理矢理ねじ込んだかな……。
私はそう思ってTwitterを開く。
案の定、
『霊幻新隆邪魔じゃね？』
『多分事務所が無理矢理セットにしたんだろ』
『霊幻どいてテルくんが見えない』
など私と同じ意見のファンがいっぱいいて、私は満足げに頷いた。
そうだろう、そうだろう。
私は正しい。
スマホをスリープにして、テレビを付ける。
丁度番宣を兼ねた音楽番組が始まったところで、『サイコテット』の影山茂夫がインタビューに応えていた。
『……僕、人とは違う力があって……』
私は驚いて思わずテレビに齧り付く。
『……それに頼らずに、生きていきたいんです……』
間違い無い。
この子は、霊能力者だ……！！
しかも、かなり強力な……！！
途端に私は心配になってしまう。テレビでは霊能力者はイロモノ扱いだ。金の為と割り切っている私はともかく、この少年は嫌な目に遭ってしまうのでは……。
『モブ、お前はそういうキャラで行くんだよな！ハイッ、リーダーの霊幻新隆でーす！！可愛い担当でーす♡インスタやティックトックフォローしてね♡♡』
『いやいやwww霊幻はギャグ担当でしょwwwうわー、１人だけ女装似合ってないねーwww』
『えっ可愛いだろ！？スカートめくる？』

『めくらないっての！！www』
茂夫少年からマイクを奪った霊幻くんにムッとする。その後もメンバーが自己紹介した後、霊幻くんがずっと喋っていた。
なんだコイツ。
もっと茂夫少年にしゃべらせろ。
私はイライラしてTwitterを開く。
みんなメンバーに喋らせない霊幻くんに怒っていて。私は溜飲が下がった。
テレビではサイコテットのデビュー曲、『守ってサイコパス』が流れ始めた。

おお、と思わず感嘆が漏れる。

まだ中学生の美少年たちが大人しめの女装をして踊る姿は、性別の壁を超えてくる。
天使。そんな言葉が脳裏をよぎる。
『守ってサイコパス♪乗り越えてソシオパス♪』
私が守ってやるぞ、茂夫少年……！！
可憐に歌い踊る茂夫少年に私がそう決意した瞬間にリーダーの霊幻くんが前に出てきて。
悪いと思いながらも内心舌打ちした。

それから茂夫少年は私の『推し』になった。

スケジュール的に可能な限りサイコテットのライブに行き、茂夫少年を見守る。
ＣＤは握手券目当てに４枚買った。しげぴょん、りっちゃん、しょっくん、てるぴのジャケットのものだ。
「次の方ー」
もちろん全部茂夫少年のために使う。
「私は君の理解者だ。いつでも頼ってくれたまえ」
「え！？あ、はあ、どうも……」
当然、メッセージも忘れない。

充実した推し活を送っていた、そんな時。

あの事件が起こった。

『あっっっっ！』

ライブの舞台で、茂夫少年が立ち位置を間違えて輝気少年に接触し、２人とも転倒してしまった。
『す、すみませ——』
「すっこめヘタクソ！！！！てめぇてるぴに迷惑かけるの何回目だよ！！！！」
輝気少年ファンが、茂夫少年に暴言を吐いたのがきっかけで、てるぴファンとしげぴょんファンに緊張が走る。
「うっせえな！！てめぇらの猿鳴きでしげぴょんの声が聞こえねえんだよ！！黙ってろ！！」
「んだと！？！？！？！？」
乱闘騒ぎに発展して、眉を顰める。
なんだ、コイツら。アイドルのライブを何だと思ってるんだ。
暴れてる全員を呪って腹痛にでもしてやろうかと思ったが、いかんせん私の力は大きすぎる。ちゃんと術式を組まないと、死人が出かねない。しげぴょんのハレの日に死者を出すのは避けたい。
が、しかし……。
「しげぴょんは黙って立たせてろ！！」
「てるぴこそ写真だけ置いとけ！！！！顔だけだろが！！！！」
『やめっ、止めてください！！』
『暴力じゃ何も解決しないよー！！』
青くなって声を張り上げる茂夫少年と輝気少年に私の顔は険しくなる。

アイドルに迷惑をかける奴は、ファン失格だ。

呪いをかけてやろうと、手をかざした時だった。

『みんなーッ！！！！』

いつものＭＣと同じテンションの霊幻くんの声に、思わず観客全員が舞台を見る。

『俺の歌をきけーッ！！！！』

面食らう観客を置いて、霊幻くんはマイクの電源を切る。

――デヘーレ！ラーヒェ、コティン！マイネム、ヘルツェン！！

霊幻新隆から、突風が吹いた。

―― トート、ウーンフェル！ツヴァイフル、フラー！メー、トゥムミッヒール！！

歌声が衝撃となって脳を揺らす。
高音の男声が気持ち良くて、誰もが聴き惚れる。

――アァアア、ア！ア！ア！ア！ア！ア！ア！！！！

美しい、美しい、美しい、美しい！！！！

「「「「レイちゃーん！」」」」

霊幻くんファンがブレードを振り始めて、思わず私もしげぴょんのブレードを振る。
つられるように会場全体でブレードを振って盛り上がる。乱闘はとっくの昔に収まっていた。

『じゃあ次の曲な、おなじみ、守ってサイコパス！』

何事も無かったかのように霊幻くんはライブを続ける。
私は感動が収まらなかった。霊幻くんは凄い。歌でケンカを止め

た。そんなの、そんなの、まさしく『アイドル』ではないか……！！

私は家に帰って、興奮する手でTwitterを漁った。今日の霊幻くんの凄さを誰かと共感したかった。

しかし。

たぐれどたぐれど、霊幻くんの話題は出てこない。私は不完全燃焼を起こした。
いやいやいや、霊幻くんのあの歌凄かっただろ！？誰か呟け！！
業を煮やした私は、『霊幻くん』で検索しようとして、ふと思い付く。
レイちゃん。確かにそんな呼び名で、コールしていた人々がいたはずだ。
レイちゃんで検索して、『Ｐｔ（※サイコテットの隠語）のレイちゃん推しです！！』と書かれたアカウントを発見して……愕然とした。
鍵アカだ。
５個ぐらい見つけたが、全部鍵アカ。
……何故隠れる！？見せろ！！呟きを！！
とりあえず私は全部のアカウントにフォロー申請をした。
……レイちゃんの話を読みたいってことをアピールした方がいいか……。
私は初めてTwitterで呟く。『今日のレイちゃん凄かった』、と。
ほどなく、１つのアカウントからフォロバが来た。
私は喜んでＴＬをたぐる。
『今日のレイちゃん神ってた！』
うんうんうんそうだな！！
『レイちゃんがマイクを握った瞬間にしげぴょんもてるぴもホッとした顔してて、さすししょ』
そうだったのか！？ライブＤＶＤが出たら良く見なければ……！！
『それにしてもあれ何の曲？Ｐｔの曲じゃないよね？』

そうだな……ん？このツイート、返信がついてるな。
『多分アレ夜の女王のアリア。レイちゃんアレ歌えるんだとしたらマジ凄いんだけど』
夜の女王のアリア……？
YouTubeで検索して、びっくりした。コレだ！このオペラ曲だ、間違い無い。動画でも凄いが……ライブハウスで聴いたレイちゃんの歌声は本当に凄まじかった。
私はライブＤＶＤを楽しみに待った。
届いたＤＶＤをワクワクしながら再生する。
が。
あの歌は収録されていなかった。
「は……！？」
私は慌ててレイちゃんファンのＴＬを見に行く。
『あー、やっぱりあの歌は入ってなかったかー』
『完全にトラブルだったもんなぁ……』
『もう一回聞きたかったな～』
レイちゃんの歌声が聴きたい……！
私はこれまでに無い飢餓感に襲われた。
レイちゃんは人気があまり無い。当然ソロ曲もほとんど無い。というか、無い。
……いや待てよ、この間の新曲のＣＤ、レイちゃんジャケのやつは特典でレイちゃんのソロが収録されてたはず……！
売り切れ。
嘘だろ、しげぴょんやてるぴのジャケのはまだ残ってるのに……！
Amazonでサイコテットの商品を検索する。ことごとくレイちゃん特典のある盤だけが売り切れていた。
……そうか、レイちゃんは人気が無いから、そもそも作られる数自体が少ないんだ……。
悲しみのあまり、Twitterに『レイちゃんのＣＤ買えなかった』と呟く。２回目の呟きだ。
『なんか前のライブで突然買いに走った人が多かったみたいです（汗）』
ついたリプに愕然とする。

私はなんと愚かなのだ……！
前から買っておけば良かった……！
この間のライブは静かに騒ぎになっていて、じわじわとレイちゃんファンを増やしていたのだ。
レイちゃんが大きく取り上げられた雑誌も、完売。とりあえず電子版を買ったが、スマホの小さな画面では物足りない。紙で欲しい。
私はため息をついて『霊幻新隆』のWikipediaを読み始めた。
ああ……やっぱりサバ読んでるんだな……ふーん、今２８才か……若っか……え！？音大卒！？昔、歌手としてデビューしてたのか！？
慌てて霊幻新隆で検索するが、たった２枚のアルバムはどちらもAmazonでは在庫が無かった。
が。
あった……ヤフオクで、１０万……。
私はかなり悩んで、
悩んで、
１０分ほど懊悩して、入札した。
落札。２日後にそのアルバムは届いた。ジャケ写は服がダサくてイマイチだが、歌声は素晴らしかった。数曲のオリジナル曲、多くのカバー曲。女性歌手のカバー曲が多く、その中でも「時には昔の話を」という曲が気に入った。
甘いレイちゃんの声に浸りながら眠る。

呪殺の仕事を引き受け始めてから、初めてぐっすり眠った。

※

腕時計のアラームで目覚める。そろそろ現場入りの時間だ。
今日はレギュラー番組、『あなたの隣の世界』の収録だ。
少し早めに現場に行って、本当に危険な霊は排除しておかないと……。事故が起こって番組が打ち切りになるのは困る。
夕方、逢魔時にロケ地についた。
悪霊が活発になる時間だ。除霊しやすくて丁度良い。

「おはようございます、最上さん」
「おはよう、いつも通り下見をしてくる」
「はぁい」
廃トンネルに入って危険な霊を消していく。
「何してるんですかぁ？」
甘ったるい香水の匂いが突然現れた。
共演者のグラビア女優だ。
「……安全確認だ」
「へえ、しっかりしてるぅ」
「危ないからロケバスに居ててくれ」
胸の大きな若い女は、品定めするように私の頭の先から足の先までを眺めた。
「ふぅん、テレビで見るより渋くていいかも……♡」
「……」
「わたし、年上の人タイプなんですう♡」
かさ、とメモをポケットに入れられて私はため息をつきたくなった。
「連絡待ってますね♡」
こういうことはままある。コアな心霊番組に出るタイプの女優は後がないことが多い。話題作りのために、流行り（・・・）の男と関係を持とうとするのだ。
「……勘弁してくれ」
私はロケバスに戻って、ポケットのメモをゴミ箱に捨てた。
「最上さん、怖がってる女の子に胸押し付けられたりしたら、少しは慌てたり赤面したりしてくださいよー」
ディレクターが苦笑してくる。
「演技しろと言うことか？」
「そうじゃなくて……分かってないな〜！ちょっとは人間らしいところ見せてくださいよ！」
どう言う意味だ、それは。失礼だな。

今日はスタジオ収録だ。ちょっとした有名人を呼んで、心霊写真特集でもするのだろう。

コンコン。楽屋をノックされる。
「どうぞ」
共演者か？挨拶とは、律儀、な……。
「最上啓示さん、初めまして！サイコテットの霊幻新隆と申します！」
ﾌｧーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！
「本日は『あなたの隣の世界』で共演させていただきますので、よろしくお願いします！」
は！？え！？握手！？！？握手券持ってないのに！？！？！？！？
「お、おっふ……」
「？」
おそるおそる差し出した手をレイちゃんは営業スマイルで握る。
「師匠、良かったですね、憧れの最上さんとの共演」
しげぴょん！？！？
レイちゃんの後ろからぞろぞろとサイコテットのメンバーが入ってきて、卒倒しそうになる。
「ウチのリーダー、最上啓示最上啓示ってうるせーんだよなぁｗアンタのファンらしいから、仲良くしてやってくれよな！」
しょっくんからそんな事を言われて頭が真っ白になる。
レイちゃんが！？！？
私のファン！？！？！？！？
「……これ、つまらないものだが」
「は！？いえ、同じものを俺も貰ってますんで……」
思わずロケ弁を差し出してレイちゃんを戸惑わせてしまう。
何をやってるんだ！！私は！！
そ、そうだ！
「……もし、困ったことがあれば、いつでもかけて来なさい」
私はメモ用紙に電話番号を走り書きして、レイちゃんに渡した。
「えっ！？」
気のせいか、その瞬間、残りのサイコテットのメンバーの目が剣呑に細められたような……。
「あ、ありがとうございます」
嬉しそうに微笑むレイちゃんがぎゅっとメモを握ったのは、もう、

脳内に１００回保存した……。

「この写真には女性の無念が染み付いている」

収録はレイちゃん１人だった。メンバーは他の番組の収録らしい。
そりゃそうか、サイコテット全員を呼んだらギャラが跳ね上がる。
「そうなんですね」
レイちゃんが私の横から写真を覗き込んで、心臓が跳ね上がった。
私はさりげなくレイちゃんから距離を取り、ワザと派手に音と光を出しながら祓う。テレビ受けってやつだ。
「うお、すげえ」
レイちゃんの声がどうしても耳に入るが、仕事に集中、集中……。
「……終わった」
「お疲れ様です！わー、顔が消えてる！！」
「あ、ああ、もう霊幻くんが触っても大丈夫だ」
私が写真をレイちゃんに渡そうとした時。
スタッフが、虫のオモチャをレイちゃんの足元に投げた。
「◯△□×〜！？！？！？」
「わっ、ちょっと！！」
レイちゃんが私に飛び付いてきた。
「ごっ、ごごごご、ゴッ……！！」
「レイちゃん、落ち着いて！」
「もっもがみさん！じょれー、じょれーして！！」
「オモチャだから！だっ大丈夫だ！！」
体重をかけられて仕方なく抱き上げてオモチャから遠ざける。
いい匂いがする！！！！
勘弁してくれ！！！！

つ、疲れた……。
楽屋で横になり、主に精神的な疲労を回復する。
「最上さん、打ち上げどうします？」
「いや、いつも通り……」
「今日はサイコテットの霊幻新隆も来るらしいっすよ」

「……………………行く」
私は起き上がって、ドレッサーに広げていた私物をポケットに突っ込んだ。

「「「「「かんぱーい！！！」」」」」
「いやー今回もありがとうございます、最上大先生！！」
ディレクターがビールを注ぎに来る。
「ああ」
私は生返事をして、ずっとレイちゃんを見ていた。
「や、俺、飲めないんで……」
「えー！？ノリ悪ーい！！」
バラエティタレントとYouTuberを足して２で割ったような女の子がレイちゃんに興味津々で絡んでいた。
「霊幻くんホントにＧ苦手なんだねー！」
さんをつけろ、素人じゃあるまいし。
私はビールを飲みながら心の中で突っ込んだ。
「あ、すみません、俺ちょっとトイレ」
レイちゃんが席を立った隙に、ディレクターがウーロンハイを頼んで、レイちゃんのウーロン茶と入れ替えた。
「え、ちょっと」
YouTuberの女の子がさっと顔を青くする。
「まーまー！霊幻くん飲めるらしいじゃん？見てみたいでしょ、霊幻くんが酔った所！」
女の子は何か言いたげに黙った。
私は慣れない酒の席で、頭がぐるぐると混乱していた。
レイちゃんが酔ったところは見たい。が、飲めないと言っているのに、騙し討ちで飲ませるのはどうなんだ？だが、あまりキツく言って、レイちゃんの立場が悪くなってはいけないし……。サイコテットはまだまだ売り出し中だ。いくつかの番組を兼任しているこのディレクターには覚えを良くしておきたいだろう。いやしかし……。
「……」
私がぐるぐると思考を堂々巡りさせてる間に、レイちゃんがトイレ

から戻ってきてしまった。
「や、どうもどうも」
席に戻って、レイちゃんがグビっとグラスを傾ける。
「「あ」」
すぐトロン、とレイちゃんの目が重くなった。
「……ディレクター、酒入れたでしょ」
至近距離からレイちゃんにじとりと睨まれてディレクターがやにさがる。
「や、お酒には慣れた方がいいって！」
「……体質的に飲めないって言ってるでしょ……まったく……」
ふわふわと危うく揺れるレイちゃんを女の子が慌てて支えようとすると、ディレクターがぐっと腰を抱いた。
「大丈夫？送っていこうか？」
ディレクターの反対の手がレイちゃんの足を撫で回す。
いよいよ女の子が息を呑んだ時に、私は立ち上がった。
「そう言えば、霊幻さんとこの後約束してた！」
全員が驚いて私を見る。
「そろそろ行こうか！」
「ふぁい」
私が手を差し出すと、ふらふらとレイちゃんも立ち上がる。
ディレクターが忌々しそうに虚空を睨んだ。
２人分ということで２万円を置いて、店を出る。
「しっかり歩きたまえ！タクシーで住所は言えるか？」
「ゆうびんきょく……？」
「……」
歩き出して酔いが回ってきたらしい。
「ここで寝ますぅ……おやすみなさい……」
「こらこらこら道端で横になるんじゃない！」
慌ててレイちゃんを支えるが、ずしっと体重をかけられてしまう。
「ちょっ……重い！」
重いし、危ない。
ふと、顔を上げると。
ビジネス利用ＯＫのラブホがあった。

「……」

これは不可抗力である。

「う……ん……」
何とかレイちゃんをベッドに寝かせて、私は部屋の中を探る。有料だが冷蔵庫に水があったので、それを取り出してレイちゃんの額に当てた。
「つめたぁい……」
「水だ。飲めるか？」
「のませて……」
「じゃあ身体を起こしなさい」
「もがみさん、くちうつしして？」
思わず酔っ払いと視線が絡み合う。
「……馬鹿言ってないで、ほら、起きて」
私はその視線を振り切ってレイちゃんの背中に手を当てて上体を起こした。
ペットボトルの口を当ててやると、こくんと喉仏が上下する。
「……もがみさん、俺とキスしたくない？」
「何を言ってるんだ」
「ＴＥＬ番くれたのに？……ね、しよ？」
するりと白い指に太ももを撫でられてギョッとする。
「……前後不覚の人間に手を出すほど悪趣味では無いよ。もう、寝たまえ。そうすれば酒も抜けるだろう」
小さくため息をついて、私はレイちゃんの眉間を軽く霊力を込めた指で押す。
意識を失ったレイちゃんはゆっくりと布団にくずおれた。
さて、どうするかな。レイちゃんのスマホや財布を勝手に見る訳にいかないし、かと言って連絡先は知らない。
仕方ない。事務所に電話するか。
……運の悪いことに、誰も出なかった。
明日も仕事だ。支払いを済ませて部屋から出ようかと思ったが、万

が一飲めない酒のせいでレイちゃんが急変したらまずい。
私はまた小さくため息をついて、ソファーベッドを広げて横になった。

次の日。
「あーっ寝坊した！！！！」
レイちゃんの澄んだ叫び声で目を覚ます。
「ごめんモブ！！俺は直接ロケ地行くわ！！もう先行っといて！！」
電話をしながらバタバタと靴を履くレイちゃん。
「支払いはしておくから、もう行きなさい」
「すみません！！」
走っていくサイコテットのリーダーに、私は仕方ないなと笑った。

その日の夜。
収録が終わって家に帰り着き、いつものレイちゃんのＣＤでもかけようかとした時。
知らない番号から電話がかかってきた。
「……はい」
警戒しながら出る。
『わ、本当に最上啓示の番号だ……』
「れ、レイちゃん！？！？」
声がひっくり返りそうになった。
『今日はすみませんでした、ご迷惑をおかけして』
「い、いや」
『……本当にすみません。俺、全部覚えてるんです』
「あっ」
なんと言っていいか分からなくなる。
『あの、言い訳にしかならないんですけど、俺、本当に最上さんのファンで』
「ふぁっ」
『……だからと言って許されることじゃないんですけど……』
「い、い、い、いや、気にしていない」

『ありがとうございます。……すみません、それだけです』
切ろうとする気配に、私は焦ってしまった。
「さっ、いんとか、いるかね！？」
『……え？』
あああ何をやっているんだ私は！！
「良ければ、しようか、サイン」
『……いいんですか？』
レイちゃんの食いつきの良さに心臓が高鳴る。
「もちろんだ」
『じゃあ、今からどこかで会います？……丁度時間空いてるんで』
たぶん、心臓５秒くらい止まった。
「か、構わないが」
『んー、どこがいいですか？新宿とか？』
「ど、ど、何処でも。タクシーで行くから問題ない」
『だったら、新宿のバー、ギャランドゥで待ち合わせしましょう。この名前の店は一軒しか無いので、Google MAPで分かるはずです』
「分かった」
『じゃあ、後で。……楽しみにしてます』
電話を切った瞬間、私は風呂場に慌てて駆け込み、全身くまなく洗った。風呂から出たら急いで歯磨きをする。他意は無い。推しに会う時の最低限の礼儀なだけだ。本当だ。
タクシーに乗って、新宿に向かう。
目的のバーで降りて、ドアを開けた。
「あ、こっちです」
ドアベルが響く中で、レイちゃんがヒラリと手を振った。

うわ……

生レイちゃんだ……

いやすご、凄いな……顔ちっさ……

テレビ局だとそんなに目立たないが、一般人の中に混ざると浮かび

上がって見える。

うーん、まぶしい。

「ここに、『霊幻新隆くんへ』ってお願いします」

気が付いたらカウンターに座ってペンを持っていた。いかん、いかん。
「……ん、この本の初版なんて良く持ってたな」
本のタイトルを何気無く確認して驚く。私が１番最初に出した『最上啓示の霊能書』。最近連発しているおまじない本に比べると、かなり専門的な呪術書だ。
「ファンだって言ってるだろ。……この本からオカルトブームが始まったんだ。当然、大事に持ってるよ」
そ、と白い手が本を撫でて、ドキッとする。
「淡々とした描写、脅かす訳じゃないのにゾクゾクする内容……『これは本物だ』、みんなそう言ってコレを買った」
「まあ、そうだな。本当の事しか書いてないからな、これは」
「真似をした子供が行方不明になった、って当時は騒ぎになったなあ……結局家出だったんだっけ」
「あれは、私が神域まで迎えに行ったんだ」
いつの間か頼んでいたフローズンダイキリを口に運ぶ。
「軽率だった。読者が多くなれば霊能力を持っている者も現れる。真似しても問題が無いように、その本の術式の殆どは私自ら破壊した。……もう、無効な呪いばかりだよ、その本の内容は」
「なるほど、そうだったんだな。……でも、俺にとっては宝物だよ」
「疑わないんだな」
「……知り合いに、同じような力持ってるやつ、いるんです」
ああ、と私は頷く。
「影山茂夫か」
「！！分かるんですか……？」
「そりゃあな。アレは相当強い力の持ち主だ。何か困ったことが

あったら、いつでも相談してくれたまえ」
キラキラと。
憧れに光る瞳を向けられて、思わず私は目を逸らした。
「あの、サインありがとうございます。……この後、どこか行きます……？」
ぶわ、と一気に汗をかいた。
「じ、じ、時間は……」
「俺は大丈夫。……最上さんの家って、ここから近いんですか？」
「まあ、タクシーで行くから……」
そこまで口にして、部屋に鎮座ましましている数々のアイドルグッズを思い出した。
「ダメだな！！！！」
「ダメなんですね！？！？」
うおおおとてつもなく勿体ないことをした気がする……。
「じゃあ、……俺の部屋、来ます？」
真っ赤になって目を逸らしながらそう言うレイちゃんに何と返したのか覚えていないが。
イエスと言った事だけは確かだ。

「散らかってますけど」
オートロックの高層マンション。
鍵は指紋認証だ。
「いや……」
レイちゃんの！！！！匂いがする！！！！
「荷物適当にソファーに置いてください」
レイちゃんがサングラスを外して、野球帽を脱ぐのを目で追いかけてしまう。
「……楽器が多いんだな」
あ゛ーっ生レイちゃん……。
「まあ、歌手目指してたんで」
目を引く縦型のアップライトピアノを筆頭に、アコースティックギター、パソコンに繋がれたキーボード？などがある。
「何か飲みますか？」

「歌手？」
「ええ」
麦茶を肉球柄のガラスコップで出しながら、レイちゃんは私の著作が並ぶ本棚の下から無造作にアルバムCDを取り出す。
「昔、ソロでアルバム出したこともあるんですよ」
ふおおおお宝ＣＤが！！聞きたいッ！！！！
「そうなんだな」
「まあ、最上さん知ってるでしょうけど」
「うん？」
「『レイちゃん』」
「」
息が止まる。
「俺をそう呼ぶのは、相当のファンなんだよなぁ……」
「……帰る」
「わーっ待って待って！！何か一曲歌ってあげますから！！」
「……」
レイちゃんの生歌には勝てなかった……。
「……録音していいか？」
「それはダメ」
レイちゃんはギターを手に取って、一本ずつ爪弾いて音を合わせていく。
「俺、音域がおかしくて。女性ボーカルの曲の方が歌い易いんです。適当に今、歌いたいやつでいい？」
「構わない」
レイちゃんはギターを何度か掻き鳴らしてから、荒井由実の『やさしさに包まれたなら』を歌い出す。魔女の宅急便というアニメのエンディング曲だ。
それこそ、優しい歌声に包まれて。
「最っ高だな……」
「……照れる」
思わず漏れた言葉にハッと赤面した。
「俺ね、本当はオペラ歌手になりたかったんですよ」
「……そうか」

「オーストリアに留学して、いざ楽団の試験を受けたら……音域がおかしい事が分かって」
「音域がおかしい？」
「俺、高い声が出過ぎるんです。世にも珍しい、男性ソプラノなんですよ」
「男性ソプラノ……」
「オペラ歌手は声の高さによってパート分けがされてて。男性は低い順にバス、バリトン、テノール。女性はアルト、メゾソプラノ、ソプラノとなっています。俺は男性なのにソプラノなので、オペラでは用無しなんですよ」
「そんな……」
「オペラは劇と歌が一緒になっています。男性役には低いパート、女性役には高いパートを歌わせるのが当然です。お芝居が分かりやすくなりますからね。俺は低い声が出ないので、オペラには出られないんですよ。カストラートみたいに少年声ってわけでもないですし」
「そうなのか……」
「オペラ歌手は諦めて帰国したんですけど、歌で食ってくのは諦められなくて。なんとかレーベルに拾って貰ってデビューしたんですけど、鳴かず飛ばずで……」
うーん、そのＣＤ本当に聞きたいな……。
「……そのＣＤあげましょうか？俺、あと何枚か持ってるんで」
「いいのか！？……あ、いや、買い取ろう」
「いいですよ。この世に１つしか存在しない最上啓示のサインのお礼です」
くすくす笑うレイちゃんにハッとする。……そう言えばサイン、書いた事なかったな……。
「こっちだけでいい」
「遠慮しなくていいんですよ、俺もＣＤケースにサインしましょうか？」
「それはサイン会に行くからいい」
「んっふwもう一つも持っていってくださいw」
「そっちは持ってるからいい」

「よく手に入りましたね！？」
「……オークションで１０万だった……」
「うわ、流石後方彼氏ヅラ」
「は？」
「あ」
気まずそうにレイちゃんは私の顔色を伺う。
「……いつも紺色のたっかいスーツとサングラスとマスクでライブに来てるの、最上さんですよね？しげぴょん推しの」
「……まあ、そうだな」
「あー……めっちゃくちゃ目立つんで、関係者は最上さんのこと把握してたんです。まあ、流石に正体が最上さんだとは思いませんでしたけど」
「そうだったのか」
「……あの……」
焦れったそうにレイちゃんがソファーの隣に移ってくる。
「最上さん、俺……」
突然の推しのドアップに固まる私とレイちゃんの間で、Apple Watchがけたたましい音を立てた。
「いけない、もうメイク落として寝ないと」
途端にレイちゃんが慌ただしく立ち上がる。
「まだ１０時前だが……」
「明日も撮影ですから、肌のために寝ないといけなくて……すみません」
「……プロなんだな」
「……色々あってアイドルやってますけど、実は生きがいなんです、今の仕事」
「……そうか」
私は微笑んで席を立つ。
「あっ」
名残惜しげに手を伸ばしたレイちゃんが、その手をそっと握る。
「……メールアドレス、良かったら交換するか？」
「！しますっ」
アドレス交換をして、私はレイちゃんの部屋を辞する。

『おやすみなさい。次オフの日教えてください』
早速届いたメールに私は思わず笑った。

※

ＣＤ最高だった……。
私は至福の時間を味わう。
今日はライブＤＶＤも届いた。
最高だ。私はふわふわした気分でTwitterを開く。
『今日の『あなたの隣の世界』見た！？！？！？！？』
……？ああ、そうか。レイちゃんが出てる回、今日放送だったのか。しまった、録画しておくんだった……ディレクターからテープ貰おう……。
『最上啓示、絶対レイちゃんファンだよね！？！？！？！？』
口元に持っていっていた発泡酒を噴き出した。
『『レイちゃん』って、『レイちゃん』って呼んでた！』
『グラビアアイドルに抱きつかれても真顔なのに、レイちゃんに抱きつかれたら顔真っ赤にして慌ててた！』
『お姫様抱っこなんてレイちゃんが初めてじゃない！？』
あああ……オタバレした……。
ま、いいか。悪い事してるわけじゃないし。

そう思っていた私が甘かった。

雑誌、フライデーに私がレイちゃんをラブホに連れて入る写真がデカデカと載る。
最上啓示は霊幻新隆に気があるのでは！？と世間に騒がれたタイミングでのスッパ抜きだ。雑誌は飛ぶように売れ、私は頭を抱えた。
何も無かった。だが世間がそれで納得してくれる訳がない。
Twitterを見て愕然とする。
『レイちゃん、最上啓示の話題作りに利用された……』
『あの最上とか言うジジイ、レイちゃんにいくら積んだんだろ……芸能界だから仕方ないにしても、枕とかして欲しく無かった

わ……』
『レイちゃん遊ばれて可哀想……もうアイドル引退かな……』
これは！！！！！！！！
いけない！！！！！！！！
私は慌てて銀座に向かう。
「最上啓示さん！！！！」
店から出てきた所で、テレビカメラとアナウンサーが待ち構えていた。
「なんだ？」
「これ生中継ですから！逃げられませんよ！噂のあの人、『サイコテット』の霊幻新隆さんとはどういうご関係で！？！？」
ふむ、と私は言葉を選ぶためにしばし悩む。
「逃げないでください！！」
「逃げてないが。そうだな……うん、私は霊幻新隆が好きだ。大好きだ。めちゃくちゃ好きだ」
「……は？」
「今回のことは私に全責任がある。軽率な行動を取ってしまったかも知れない。だから霊幻くんを悪く言うのはやめて貰いたい」
「あ、あの」
「……私の好きは、結婚を考えた好きだ。霊幻くんとのことは真剣に考えている」
私はポケットから買ったばかりのペアリングを取り出して見せた。
「……あの、事務所の見解を待たずにそう言う事公表していいんですか……？」
恐る恐るアナウンサーが言ってきて、あ、またやってしまったかも知れないと苦々しく顔を歪めた。
「……まあ、これは私の気持ちだ。うん。私の片想い」
「はあ！？……えーと、霊幻さんのどう言うところが良かったんですか……？」
アナウンサーがチラチラとカンペを求めながら苦し紛れの質問を私にしてくる。
「そうだな、まずはあの圧倒的な歌唱力だな。グループ曲を歌ってる時の歌声が彼の本気だと考えてはいけない。ご存知だとは思う

が、歌声というのはグループで歌う時には平均に合わせなくてはいけないから、レイちゃんは本気で歌う訳にはいかないんだ。ただ、グループで歌っている時でも彼の甘い高音は際立っている。サイコテットの曲を聴くときには是非いいスピーカーを使いたまえ。ハイレゾ対応のやつな。レイちゃんの高音、てるぴの低音を味あわないのは勿体ないぞ。おススメは３ｒｄアルバムの『恋するサイコパス』だがサイコテット初心者にはちょっとクセが強いから、初めて聴くならやっぱり『守ってサイコパス』だな。ダンスもいいから是非ＤＶＤを買って欲しいが、やはり音質ならＣＤだから、両方買うのがオススメだ。レイちゃんの高音と言えば外せないのが５ｔｈアルバムの『サイコパスの夜明け』だが」
「ヒェッ」
私は存分にレイちゃんの好きな所をアピールした。どこを切り取られてもいいように。
……まさか２時間喋り続けたのが、
全部放送されていたとは思わなかった……。

私は楽屋でTwitterを開く。
『【朗報】最上啓示、レイちゃんガチ勢』
『もがみんすごい、めちゃくちゃ詳しい』
『もがみんレイちゃん最推しの箱推しだった』
『いい年こいてアイドルオタクとかキモくね？』
『推し活に年齢関係ねーよすっこんでろ　もがみんといい酒のめそう』
やれやれ、なんとかフォローできたかな……。

コンコン。ドアがノックされた。

「はい」

きぃいいい、と気のせいかおどろおどろしくドアが開く。
「……お話があります」
聞いた事ないような、ひっくい声のりっちゃんが入ってきた。

「え！？は！？」
怖い顔をしたサイコテットのメンバーが入ってくる。レイちゃんは居ない。
「最上さん、どういうつもり？テレビであんな事言うなんて」
てるぴの麗しい顔がめちゃくちゃ怖い。中学生組に囲まれた。なんだこの綺麗なリンチは。
「……あんな事、とは？」
「アイドルに交際発覚は致命的なのは分かってるでしょう！？最上さん、あなたは……師匠を潰したいんですか？」
「ちっ、違う！ラブホに入るところを抑えられた以上、ああ言うしかなくてだな……！」
「……じゃあやっぱり、師匠を弄んだんだ……」
ガタガタと部屋の小物が揺れる。ポルターガイストか……！？
いや、違う……しげぴょんの霊力が漏れているんだ……！
「おっ、落ち着きたまえ！」
「言い逃れとは見苦しいぜ、最上啓示！」
しょっくんからも霊力を感じて、私は驚いて振り返る。てるぴからも、りっちゃんからも霊力を感じた。
彼らはレイちゃんを除いて、全員霊能力者だったのか……！
「やめっ……！う、っ……！」
剥き出しの高濃度の霊力を浴びて、頭痛がしてきた。まずい……！
このままでは、死んでしまう……！
せめて１番力の強いしげぴょんを倒さないと……！
「こらっ！こんな所で超常決戦してるんじゃない！！」
私が手のひらをしげぴょんに向けた所で、レイちゃんの澄んだ声が響いた。
「あ、っ、師匠……！」
「その力は人に向けるなって言った筈だが？」
「ひ、人には向けてないです！」
「脅しに使ったら一緒だろう！？ったく……すみません、最上さん」
「いや……」
中学生組４人は畳の上に正座している。

「お前らなんでこんな事したんだ！？」
「……だって、最上さんが師匠を弄んだんだと思って……」
「あー、あのニュースか……お前らは気にしないでいいって事務所からも言われただろ？」
「でも……ッ！僕、僕、師匠が居なくなったらアイドルなんて、続けられないです……ッ！」
不安そうにしげぴょんが膝の上に視線を落とす。
「この力を理解してくれたのも、それを役立てることを教えてくれたのも、アイドルなんて大役をやってみようと思ったのも、全部師匠だ。師匠のおかげだ。師匠がセンターに立ってくれるから、僕は安心してステージに立てるんです……！」
そうだったのか……。
「ま、際どい衣装を着せられそうになった時に、真っ向から闘ってくれる人が居なくなるのも困りますし」
りっちゃんの言葉に納得がいく。サイコテットの衣装は品のいいものが多い。……レイちゃんの衣装を除いて、だが。
「最上さんが撹乱してくれたから、その間に事務所が対処してくれるから、大丈夫だって」
「撹乱？何の話だ？」
「え？結婚するとか何とか嘘を……」
「嘘ではないが？」
私はドレッサーのワキに置いていたリングケースを開いて、指輪をレイちゃんの左手の薬指にはめる。
「わあすげえぴったりなんでサイズ知ってんの」
「anan 6 月号で答えてただろ」
「良く知ってんな〜……ってそうじゃねえ！は！？付き合ってもいないのにプロポーズ！？！？」
「ん？付き合って無かったのかね？キミは付き合ってもいない男に肉体関係を持ちかけるのか？」
「「「「は？？？」」」」
「うわっ最上さん！！子供の前でやめてくれよ！！」
「否定しないんですか霊幻さん」
「う、あ……」

りっちゃんのツッコミにレイちゃんは真っ赤になって俯く。

うん……。

可愛いな……。

「その指輪はキミのものだ。……どう言う意味かは賢いキミなら分かるな？」

小さくコクリと頷くレイちゃんが、すっと私の左手の薬指にペアリングのもう一つをはめてくる。
中学生組４人が呆れたようにため息をついた。

ふふ。

展開が早くて追いつけん。

※

「あっと言う間に鎮火したな……」
レイちゃんの髪をドライヤーの冷風で乾かしながら私はポツリと呟く。
「こういうのはさあ、隠してるのをあばくのが楽しいんだよ。最初っから『結婚しま〜すラブラブで〜す♡』って言われたらツマンネってなるんだよ」
「そういうものか……」
ドライヤーを止めて、ヘアオイルを付けて髪にくぐらせる。
「……なあ」
「ん？」
絨毯の上に座っていた新隆くんが、私の膝に身体をもたれかからせてくる。
「今日の俺の服……どう？」
新隆くんは今日はもこもこしたジェラートピケの部屋着をきている。

ホットパンツから覗くスラリとした足、がばっと開いた襟ぐり。
「可愛いと思う」
「そ、そう」
ちょっと扇情的だとは思うが、人がどんな部屋着をきようと自由だろう。
「触りたくなんねえ？ほら、この服、手触りいいし」
「そうだな、触りたくなるな」
「だろ！？！？」
私は頷いてドライヤーを片付け、もはや勝手知ったる新隆くんの部屋で、ゴソゴソと新隆くんには炭酸水を、自分には発泡酒を取り出す。
「……もうっ！啓示さん、えっちしよって言ってんの！！！！」
「え！？」
言ってたか！？！？
「なんでこういうことはめちゃくちゃ鈍いんだよ！！……嫌か？」
「嫌ではないが……ちょっと早くないか？付き合って１週間足らずでやるものなのか？」
「そういうもんだろ？お互いいい大人だし」
「そ、そうか……しかしだな、そんな急に話を持ちかけられても、何も準備してないぞ」
「……ゴムとローションなら買ってある」
私は戸惑う。新隆くんのかなりデリケートな部分に触れるのだ。こんなに急に言われて、傷付けない自信が無かった。
「……新隆くん」
私が腕を広げると、嬉しそうに新隆くんが飛び込んでくる。
そっと抱きしめると、ずぐ、と劣情が腰にわだかまる。
が、それ以上に。
愛おしさで、どうにかなってしまいそうだ。
彼は、私の人生の最後の宝物だろう。私に与えられた、最後のぬくもりだ。
……年若い新隆くんには、意味が分からないだろうが。
「……キスして」
焦ったそうに、顔を赤くした新隆くんが目を閉じて、ん、と言う。

私はおそるおそる、そっと唇を合わせた。
「啓示さん……」
潤んだ瞳でやにわに唇を開いて舌を差し出す新隆くんに、首を振る。
「歌手の舌に触れるほど愚かではない」
不満そうに新隆くんは口を閉じた。
「……なあ、興奮してる？」
すり、とスラックスの上から新隆くんが性器に触れてくる。
「……そりゃあ」
掠れた私の声に、満足そうに新隆くんは微笑んだ。
「触っていい？」
「ああ」
新隆くんが私のスラックスの金具を外し、下着をずらして性器を取り出す。
「は、っ……」
私も新隆くんのホットパンツに手をかけたら、ビクリと彼の身体が跳ねた。
「……嫌か？」
「違っ、すごい……興奮して」
ぽす、と新隆くんは頭を私の肩に預けてくる。
「……脱がせて？」
生唾が喉を流れた。
下着ごとホットパンツをずらすと、白くて丸い尻と、色の淡い性器があらわになる。
「ピンクなんだな」
「……っ」
羞恥に息を詰めた新隆くんの性器を、片手で握り込んでやわやわと揉む。
「ゃっ……あ、あっ……」
耳をくすぐる声に性器が膨張する。
芯が入ってきた霊幻くんのペニスを、くっくっと手のひらで擦った。
「ぁっ！あ……あ……」

快楽を味わって震えるまつ毛をじんわりと眺める。
「はっ……は、っ……」
「ん、っ……ぅ、あ……！」
新隆くんの足がガクガクと震えてきたので、慌ててソファーに座らせる。危ない。
「あッ……けいじさ……ッ」
「新隆くん……」
視線をからみ合わせて、ゆったりと口づける。
触れるか触れないかの感覚で親指で鈴口を擦ると、きゅうと切なそうに新隆くんの喉が鳴った。
「もっ……ぐりって、してっ……」
「ん……」
ぐ、と彼の手に陰茎を押し付けると同時に、もどかしさを与えていた指で先端をぐりっと擦ってやる。
「あぁ……ッ！」
「……ッ」
右手がどぷどぷと溢れる性液と、びくんびくんと鼓動する性器でぬるく濡れる。
新隆くんの気持ち良さげな声に耳を侵されながら、私も彼の手の中に出した。
「……ふふ」
くすぐったそうに笑う新隆くんと抱き合おうとして、お互い手が性液まみれなのを思い出して、また笑った。

※

『あなたの隣の世界』の収録日。
めでたくレギュラーとなった新隆くんが私の楽屋に遊びに来て、だらだらと畳に寝転んで私の台本を読んでいた。
私に新隆くんが絡むと人間臭くて面白い、とか、なんとか。
なんにせよレイちゃんのレギュラーが増えるのはいいことだ。
「へー、あの謎の呪文、台本に書いてあるんだな」
「本来ほとんどの除霊に詠唱なぞ要らんのだよ、私はな。が、テレ

ビ映えするから呪文を言って欲しいとのことだ」
「一所懸命覚えたのに、あれ無駄だったのか……」
「容易に真似できることはメディアにもう出さないことにしてるからな」
ごろん、と新隆くんが仰向けになって台本をめくった。
「最上さん、レイちゃん、入るよー」
「ああ」
ディレクターが飲み物を手に楽屋に入ってきた。
「これ、今話題のスムージー！差し入れ〜」
テーブルに置かれた飲み物を、新隆くんがぐびっとすする。
「美味しい！啓示さんもほら、飲んでみてよ」
「ん……」
一口すする。確かに美味しい。
「最上さん、今日除霊してもらう人なんだけどさ、肩を痛めたらしくって、そこは触らないようにして欲しいって……」
「……どの人だ？」
ぐびぐびとスムージーを飲む新隆くんを横目に、私はディレクターが差し出す台本を覗き込む。

ほどなく、意識が無くなった。

腕が痛い。
ふ、と目覚めると、手が後ろに拘束されていることに気がつく。
なんだ？何が起こった？
「レイちゃん……レイちゃん……」
開いた目の前には、信じられない光景が広がっていた。
ディレクターが、気を失っている新隆くんの服をあばいている。
「何を……している？」
スマホで撮影しながら、ディレクターは、新隆くんの淡い色の乳首を指で弄る。
「俺が……俺が先に目を付けたのに、なんでこうなるんだよ！レイちゃんを番組に呼んだのも俺なのに……！」
私は目を細める。うーん、老人の嫉妬は醜いな。ああは成りたくな

いものだ。
「色々な巡り合わせでそうなるものだ。愚かな事はやめなさい」
「うるせぇ！お前もどうせ飽きたら別れるんだろう？じゃあちょっとぐらい使わせろよ！アイドルなんていくらでもわいて出てくるからな、こいつだってしばらくすればＡＶ落ちなんだからな！」
「……は？」
低い声が出た。
「よくも、よくも私の前で、アイドルさんを、レイちゃんを侮辱できたものだな？」
ばつばつばつ、と私の手を拘束していた縄が千々に切れて、ディレクターが驚愕する。
「お前が誰を怒らせたのか、何（・）を怒らせたのか、とくと思い知るがいい」
立ち上がって手をコキコキと鳴らす。
「おまっ、お前、本当に霊能力者だったのか……！」
「そんな風に思っていたのか」
もはや、笑けてきた。
「スウモモ　ミコシカ　ミコシカ　トセメシコキ」
手を差し出して呪詞を唱える。
「ぐっ、！？」
ディレクターは喉を押さえて苦しみ始めた。
「ヲトコス　ウモトヘ　エマタメ　ヨキ……」
「うぅっ、ぐ、あ……ッ！」
「……んがっ」
はた、と目覚めた新隆くんが、もがき苦しむ性器を露出したディレクターと、半裸の自分と、手をかざす私を見て事態を把握する。
とんとん、と新隆くんが耳を叩いたので、私は慌てて両手で耳を塞いだ。
「ぶはっ！お前ら……ッ！」
私の呪いから解放されたディレクターが息をした瞬間。

Ａｈ――――――――――――！

１００００ｃｃの肺活量が部屋を荒れ狂う。
新隆くんの声が、楽屋の鏡にヒビを入れ、置いてあったグラスを弾けさせ、ディレクターの脳をシャッフルする。
「今の声……っ！何かあったんですか、師匠！」
サイコテットの残りのメンバーがライブ衣装で楽屋に乗り込んでくる。
「「「「は？」」」」
半裸の新隆くんと露出しているディレクターに剣呑な声が響いた。
「なっっっっにしてるんですか、貴方！」
りっちゃんの怒声にディレクターは逸物をしまいながら舌打ちする。
「君たちこそ、何？俺を脅す気？分かってないなあ、芸能界でやってくには敵に回しちゃいけない人っているんだよ？？」
「いやいやいや、オッサンこそ、俺の親父が鈴木プロダクションの社長だってこと忘れてねえ？」
「……あ゛っ」
しょっくんの言葉にディレクターが青くなる。
「……僕も、ちょっと怒ったかな。事務所に相談させてもらいます」
◯◯芸能の秘蔵っ子であるしげぴょんがひっっっくい声で言い放つ。
ディレクターはそそくさと退室していった。
新隆くんと中学生組は警察に言うかどうか相談している。
余談だが、このディレクターは徐々に仕事が少なくなり、気がつくと業界から消えていた。
この件が関与しているかどうかは、分からない。

※

「最上啓示さん」
「はい」
大真面目に正座する新隆くんにつられて、私も正座する。
「私とセックスしてください」

「は……えぇ！？」
コンドームの上に手を揃えて土下座する新隆くんに面食らう。
「ど、どうした！？というか何で敬語なんだ！？！？」
「……っだって、啓示さんがどれだけ誘っても手を出してくれないから！！」
「いや、そんなに誘われた記憶は無いが！？！？」
「っそれは！！！！」
新隆くんが真っ赤になる。今てれる所あったか？
「ともかくっ……う、後ろも慣らしてあるしっ……」
「……明日は？」
「オフです問題ないです」
「じゃあ」
いつものようにズボンに手を伸ばそうとすると、その手をきゅっと新隆くんに握られる。
「俺……啓示さんに、抱かれたい」
推しのボイスやっっっば。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！風呂入って爪切ってくるから！！」
どくどくと心臓がやかましい。まさかこの年で好きな人で童貞捨てるとは思ってもみなかった。
全身を石鹸で念入りに洗って、戻る。
「ま、待たせた……」
「ほんとだよ」
新隆くんは全裸になって、ベッドに腰掛けていた。
「啓示さんも、脱いで」
「あ、ああ」
全裸になって、そっと新隆くんをベッドに押し倒す。
「そんな、びくびくしながら触らなくてもいいんだけど？」
「キミに触れるのは恐ろしい」
「壊しそう？」
「違う。火傷しそうだ」
笑う新隆くんに口付ける。
頬に触れた手を、喉に滑らせた。少し冷えている。筋と、喉仏の起伏。

味わうように手を胸の上に滑らせた。
「あ……」
期待に新隆くんがかすかな声を漏らす。
せわしなく上下する胸の中心を、指の背で何度も撫でる。あばらがぽこぽこして気持ちいい。
「ん……う……」
色の淡い薄い皮膚に触れると、ひくりと新隆くんの喉が上下した。
「気持ちいいか？」
「わ、かんない……どきどきする……」
ピンク色のつるつるした乳首を、人差し指の腹でゆっくりと何度も往復させて撫でる。
「ん……ん……」
新隆くんがむず痒そうにみじろぎすると、わずかに隆起してきた。
「あ……あ……！」
指に引っかかるのも構わずに、撫で続ける。勃ち上がった中心を私の少し固くなった指の皮膚でざらりと撫でると、はあっと堪らなげに新隆くんが息を吐いた。
「け、いじさっ……あ、あぁっ……」
肌がじわじわと赤くなっていくのに、私も煽られる。
ひたりと舌を当てて、わずかに力を入れて乳首や乳輪のデコボコを辿る。
「ウ、んっ！」
ぬめる粘膜からの刺激に新隆くんは思わず私の髪を掴んだ。
「あァ……っ！は、っァう……」
そのまま口を下ろして、ぐ、と皮膚全体を持ち上げるように吸い上げる。
「んァ……っ！」
震える指が髪をくぐって、頭皮を撫ぜるのが心地よい。
一旦唇を離して、私は新隆くんが用意してくれたローションを中指に絡める。
「挿れるぞ」
ぐちゅ、と音を立てて新隆くんの後ろが指を呑み込む。
「つめた……ッ」

「大丈夫か？」
新隆くんの様子を見ながら、くちゅくちゅと浅い所で指を動かす。
指の中程に括約筋の肉輪が、指の腹に肉の段差が伝わってきて、身体が熱くなってきた。
「へ、いき……ッ……あ、そこッ」
指を少し深く埋めると、少しふっくらした肉の塊に触れた。
「気持ちいいか？」
こくこくと頷く新隆くんを見て、く、く、と私は指の先端をわずかに曲げた。
「ア♡ア……っ♡」
指の動きに合わせて新隆くんが嬌声を上げて、くらくらした。
「あぁああっ♡んン、うあ……♡」
大きく開いた新隆くんの足が私のふくらはぎを擦る。
指の根本を食んでいた締め付けが弱くなった。頃合いだろうか、私は指を抜いてローションを足し、中指と揃えて人差し指も挿入した。
「ぅ、っん」
新隆くんが慣れるのを待つ。早くなった呼吸が落ち着いてきたので、指で中の様子を楽しむ。熱くて、柔らかい。が、突然ぐぐぐと締まって、ゴム鞠のようになる。
「やぁっ……ん、けいじ、さん……」
シーツに縋って私を呼ぶ。
指を抜いて、薬指も足した。
ぎち、と無理矢理パッキンを伸ばすかのような感触。入り口の狭さに少し不安になる。
「ん、ん、ん……♡」
せめてもと指をわずかに曲げ伸ばししていたら、気持ち良かったのか、徐々に緊張が取れていった。
「……だいぶ解けたな」
「ん……」
指をゆっくり出し入れしながら言うと、新隆くんがすっとコンドームを差し出してくる。
「口でつけよっか？」

「駄目だ。喉にどんな影響があるか分からないだろうが。変なもの口に入れるんじゃない」
手をシーツでぬぐってから、ゴムを手に取る。
ちょっと不満げだった新隆くんが、嬉しそうに私の太ももの裏をかかとで撫でた。
「入って」
「ああ」
ぐ、とローションで濡らしたゴムで包まれた先端を、肉輪に押し付ける。思ったより強い反発に私は不安そうに新隆くんを見上げた。
「平気」
新隆くんの言葉に、ぐっと腰を進める。う……
「……出そう……」
「えっ一回出す？」
「いや……そんなに何回も出来ないから……」
コメカミに青筋を立てて耐えながら、熱くてしゃぶりあげるような内部をかき分けていく。
「あっ……♡」
ひく、と新隆くんの腹筋がひきつれた。
「すごっ……♡ちょっとイったあ……っ」
「は、っ」
びく、びくと締め付けてきた内部の弾力を、息を吐いてやり過ごす。
「俺、最上啓示とセックスしてる……っ♡」
うっとりと私の頬を撫でる新隆くんが、私を見ているようで、見ていなくて。
「ア、ッ♡」
なんだか面白くなくて、ぐ、と腰を進めると、新隆くんの目が私を捉えた。
「挿れられてるだけで……ッ♡イきそ……ッ♡」
気持ちの良さそうな様子に安心して、ゆっくりと引き抜く。
「ん、ぐ……」
性器のかえしがヒダに引っかかって、弾かれる。
「あぁあああぁっ♡♡♡抜かれるの、ヤバ……ッ♡」

「大丈夫か？」
「きもちいいっ♡」
ぞわぞわと鳥肌を立てる新隆くんの腕を見て、また腰を進める。
「んぁあぁああっ♡キモチい……っ♡」
様子を見ながら、徐々に抽挿の速度を上げていく。
「やっ♡ヤバいっ♡ヤバっ♡やばいぃ……っ♡」
新隆くんの足を肩に担いで、ギシギシとベッドを鳴らす。本当にギシギシ言うんだな、今後はベッドの軋みを聞くだけで興奮しそうだ……ッ！
「気持ちいいか……？」
「きもちイイっ♡あ、あ、あ、イク……ッ♡♡♡」
一瞬内部の締め付けがふっと消えたかと思ったら、反動のようにビクンビクンと鼓動しはじめた。心臓の中に突っ込んでるかのようだ。たまらず搾り取られる。
「く……ッ！」
「すご……っ♡ドクドクしてる……っ♡」
は、は、と浅い息を繰り返して上下する胸を、はむっとしゃぶる。
「あ……ッ♡」
喉を逸らした新隆くんの内部が、つん、と尖らせた舌の先で先端をえぐる度にひくっと横から突いてくる。
「ん……♡ふ、ぁ……っ♡」
ひくひくひく、と内部が痙攣したのを待って、性器を抜く。
新隆くんのコメカミに、頬に、口付けた。

※

「啓示さん、既成事実を作った所でお願いがあるんだけど」
「きせいじじつ……？まあいいか。なんだ？」
「籍入れてください」
きょとんとする。籍と既成事実と何の関係があるんだ……？まあいいか。
「……じゃあ今から区役所行くか？車出すから」
「やった！行きましょう！」

区役所でパートナーシップ届を出し、住民票の写真を撮る。新隆くんはいそいそとＳＮＳに上げていた。
「啓示さんもＳＮＳで報告してくれよ！あっ、Twitterあるじゃん」
「あ゛　」
ぺっ、と新隆くんが私の個人的なアカウントで写真を上げてしまう。
ＴＬが
『もがみん……？』
『えっ嘘本人？』
『レイちゃんも同じような写真上げてた』
『あばばばばばば』
と荒れた後、次々と私はブロックされた。
「……」
「あっ、もしかして個人アカだった……？」
「いや、大丈夫だ」
どうしても見たければ別アカ作ればいいだけだしな……。
「ところで、名実ともにパートナーになったわけだし？」
「ん？」
「啓示さんの部屋に入れて欲しいんですが」
どわ、と冷や汗が吹き出す。
「それは、その……」
「ふーん、どうしても見せたくないんだ……女？」
「違うッ！アイドルグッズが……あ」
さっそく不貞を疑われたことに焦って、つい漏らしてしまった。
「……まあ、見た方が早い」
私は車を家まで回す。
「うわ、すっご」
所狭しと並ぶアイドルグッズに、新隆くんは素直に感嘆を漏らす。
「へー……隠すような事じゃないのに」
「相手によるだろう……」
新隆くんが無造作にサイコテットのファンブックを取って、ハッとする。
バラバラと写真が落ちた。

「これ……」
色んな人間の写真。一部の写真には顔にバツが記してある。
……ターゲットの写真だ。
「……アイドルのチェキだ……」
「いや無理があるだろ！なんで顔にバツ付けるんだよ！」
「……そういう性癖で……」
「いやもう素直に呪いの依頼を受けてたって言った方が傷が浅いって！！」
ぐ、と口をつぐんで項垂れる。

ああ、終わりか。

「もー、こんなことしちゃ駄目だぜ？啓示さんの力は人を傷付けるためにあるんじゃないんだからな」
ばっと顔を上げる。
「わ、私は、人を……！」
「そっか。でも、俺、啓示さんが好きだからなあ。……人殺しの啓示さんが、好きだよ」
柔らかく微笑う新隆くんに、ぐ、と押し黙る。
「それにしても、なんで殺しなんか引き受けたんだ？ガラじゃないだろ」
「……金が必要だったんだ。母の治療費が足りなくて……」
新隆くんの眉が寄る。
「……啓示さん、ギャラいくら貰ってる？」
「……万だが」
「おかしい、少ない。レギュラーなのにその額？一回マネージャーや事務所と話させて。それに、高額療養費制度使ってる？」
「こうがく……？」
「全部自腹で払ってたの！？！？もっかい役所行くぞ！！」

新隆くんの口利きで、私の家計は随分と楽になった。

私が呪いの仕事を受けなくなってしばらくすると、母の容体は安定

し始めた。理由は分からない。

「母さん、まえ話してた、霊幻新隆さんだよ」

緊張しながら病室の母に新隆くんを紹介する。

「……顔ちっっっさ」

親子で同じことを思ったのに、思わず私は笑った。

（あったかもしれない世界のおはなし）

終